

第3回勉強会より ('82.10.30,日本スポーツマンクラブ)

「ジャーナリズムの中の女性スポーツ」

三ツ谷 洋子

スポーツにでなく女性に重点を置く報道

女性スポーツを取りあげるメディアはテレビ、新聞、雑誌などいろいろありますが、ここでは多くのジャーナリズムが、女性スポーツを一つの“見せ物”のように扱っているという点から、話をしたいと思います。

まず最初に、私の個人的な体験をちょっとご披露します。私は以前、あるスポーツ新聞の記者をしていました。ちょうどプロボウリングの人气がピークに達した10年ほど前に、こんなことがありました。ある大会を取材したんですが、このとき試合の原稿を書いている私のところに、優勝した並木恵美子プロの写真が届きました。左足をグッと前に出してボールを投げようとしている瞬間のショットです。これが、何と白いパンティーがはっきり見えるものなのです。編集部の男性が集まってきてニヤニヤガヤガヤ。

「別の写真にしてほしい」という私の声はかき消され、かくして私の記事のとなりになられもない(と私が思う)写真がのったのです。同じ女性としてとても恥ずかしく、また、このとき初めて男女の女性スポーツに対する見方の違いに気がついたのです。

この“事件”以来、女性スポーツに対する紋切り型の報道に、疑問を持つようになりました。よく新聞の見出しで見かける“赤い気炎”“女の戦い”——といった常とう文句は「女性スポーツ」の「女性」の方ばかり気をとられた物の見方であると思うのです。この傾向は、男性雑誌においてさらに強まります。昨年、体協内で問題になった「スポーツ激撮術」(岸本健著)

も、そうした観点からすれば、とんでもない内容の本でした。ひたすら女子選手の股間に焦点を当てた写真の連続で、ページをめくっていくうちに腹立たしいのを通りすぎてあきれかえり本を閉じてしまったくらいです。

たしかに、女性スポーツの場合は、見せるという要素を否定することはできません。体操やフィギュアスケートだけでなく、テニスやゴルフの選手も、見た目を意識してウエアのコーディネートに気をつかいます。しかし、だからといって「女性スポーツ」について「女性」というところだけを強調して、「スポーツ」をないがしろにしているのは、やはり公正な報道の立場からすれば、問題があるといえるでしょう。

現在、日本のスポーツ新聞の発行部数は900万部をこえ、おそらく世界一。とはいっても、新聞社というところは、紙面では新しいものが好きなくせに、企業の体質は非常に保守的で、編集責任者はほとんど男性です。これでは、女性の意見もあまり反映されないのも当然といえます。また、出版界のシニセである文芸春秋がスポーツ総合雑誌「ナンバー」を発行して2年半が経過しました。男性読者が多いせいか、やはり見せる女性スポーツの話題に重きを置いています。いずれにしても、これだけスポーツが盛んな現在、男性スポーツも含めて、見るスポーツのための情報がほとんどのような気がします。私自身、スポーツジャーナリストとしてだけでなく、このWSF Japan Newsの発行者としても、スポーツをする女性のための雑誌を是非、作りたいと思います。

WSF Japan 創立1周年記念シンポジウム

「スポーツに生きるとき」

女性スポーツの在り方を考え、その発展を目指すサークル、WSF Japan (Women's Sports Foundation Japan)が発足して1年。今回は1周年を記念して、「スポーツに生きるとき」と題したシンポジウムを開催いたします。スポーツを仕事とし世界を舞台に活躍してきた一流女子選手に、スポーツを通じた彼女たちの生き方を語っていただきます。

女性の自立があちこちで叫ばれている現在、1人の“自立した女性”“職業人としてのスポーツ選手”の生の声を聞くことは、目的を持って生きていこうとする一般の女性にも、とても参考になるはずです。

- ▷テーマ 「スポーツに生きるとき」
- ▷出席者 生沼スミ江(バレーボール)
小林則子(ヨット)
杉本勝子(プロボウリング)
佐藤直子(プロテニス)
三ツ谷洋子(司会=WSF Japan代表)
- ▷日時 2月1日(火)午後3時~5時
- ▷会場 西武百貨店池袋店8階スタジオ200
- ▷参加費 会員無料、一般800円
- ▷申込み 1月26日までに電話で事務局まで
☎ 03 (402) 0065